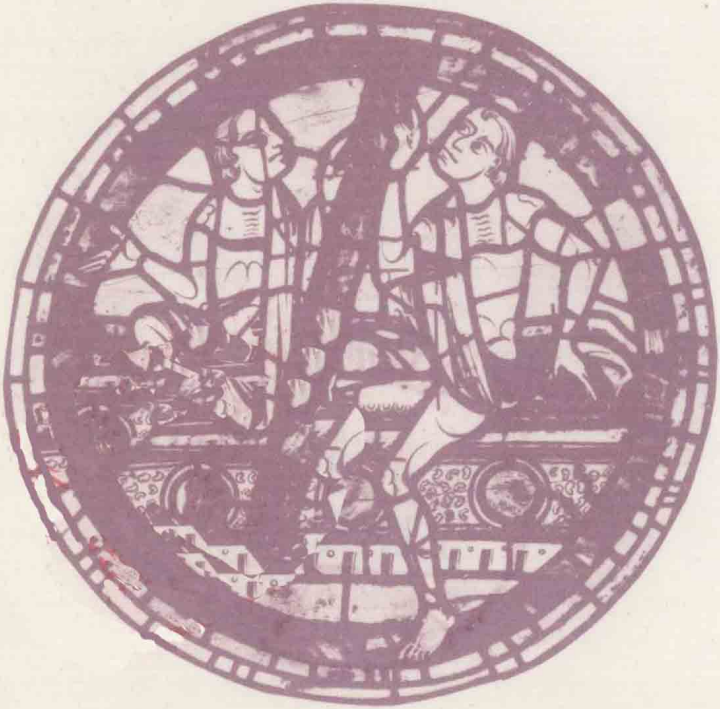
或る聖書　小川国夫



筑摩書房

或る聖書

一九七三年九月二十五日第一刷発行
一九七三年十一月十日第三刷発行

著者　小川国夫
発行者　井上達三
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三
郵便番号一〇一―九一
印刷　厚徳社　製本　矢島製本
装幀者　栃折久美子
©一九七三年　小川国夫

（分類）0093（製品）80096（出版社）4604

或る聖書　目次

一部　ともに在りし時　五
二部　なぜ我を棄てたまいしか　六七
三部　その血は我に　一六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

或る聖書

一部　ともに在りし時

一章

鍛冶屋は大鎌を火から出して、鉄床の上へ乗せた。彼は一気に正確に、刃の厚い部分を尖へ送り、最後の形をつけた。透かして見ると平に殺げていた。鉄は十分に錬れていた。手早くやったので鉄はまだ熱く、必要があればもっと叩くこともできた。しかし、もうその必要はなかった。彼は舟形の大鎌を油に入れた。油は鉄の上で弾み、玉になって踊ったが、引き揚げるとすぐになじんだ。刃には荒野の光が暗い虹になって映り、彼は吸いこまれるような眼をした。

――ユニアは今日も荒野へ行きたいというだろうか、と鍛冶屋は呟いた。

あいつの眼は澄んでいるが、日ましに赤くなって、兎の眼みたいになる。視界には白い光が裂けて、自分の眼脂が虹になって見える。それからだんだん変ってきて、底まで飴の色に透きとおる。そうなったら、あいつも空の灰色の孔みたいな太陽を見つめることができる。平気で荒野を、十日でも二十日でも歩くことができる。

あいつにそうなってほしいと、俺は思っているのだろうか。あいつならそうなれるかもしれない。しかし、一体俺の方はどうなっているのか。盲が盲を手引きして、二人して崖を踏みはずす、か。それは

反逆者イシュアの言葉だった。

——考えるのはやめた。話すのもやめた。関係なしだ。

彼は大鎌をとぎ始めた。彼の手はほとんど、いつもの通りに動いた。古い砥石を巧みに使った。彼は一個しか砥石を持っていなかったが、グルリに出来た様々な丸みを適当に使った。彼の右手は、測って突き刺すように直線運動をした。大鎌をといでしまうと、草刈鎌をとぎ始めた。それが終りに近づき、ユニアがやって来ると、

——来たな、病気はだれが運んで、どうして伝染るのか、と鍛冶屋は呟いた。そして、

——どうした。鴉はまだ肩に止っているか。谷へ帰ったかな、とユニアにいった。

考えごとは鴉が運ぶといういい伝えがあったから、彼はそう尋ねた。ユニアの唇も眼もそれには応えなかった。唇は少し開いたきりだった。眼は少し遠くを見ていた。馭者が車の上から、進んで行く馬の背を見ているくらいだった。

彼は壺に入れた水と羊の干肉と、パンと黒くなったオリーヴの実を持ってきた。彼はそのことをいい、

——今食べるか、と聞いた。

——食べようかの、と鍛冶屋はいった。

ユニアは壺を銹と燃え殻の地面へ置き、食物を包んだ麻布を開き、鉄床が冷えているのを確かめて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その上へ置いた。

——鴉はまだいる、と鍛冶屋はユニアを見つめて、呟いた。

——……。

——わしはお前が餌をくれるんで話すんだぞ。お前がどうこうするようにと喋るわけじゃあない。わしにはこうなってほしいということはない。なんにも望みはない。望むとろくなことはないからな。

彼は笑いながら、ふいごの柄を動かした。石の混った泥炭の燠(おき)が、赤く透きとおった。

——見ろ。お前さんの胸だ、と彼はいった。

ユニアは半ば暗示にかかり、その通りだと思った。彼は夢の中で火の芯のような心臓を感じながら、あの光景を見ていたことがあった。

上縁が空と境を接している崖を、荒野の修行者たちが登っていた。ほとんどの人々がもう高いところにいた。自分たちを乗せていた土地が急に直立したので、困っているふうだった。下りることができないから、余儀なく登っているとも見えた。ユニアの夢はそこで一旦停止していた。彼らはほとんど動かなかったので、ユニアは、この人たちが空の縁へたどりつくのと、崖が揺れ始めるのと、どっちが先かななどと考え、不安になったほどだ。陽が降り注ぎながら、一個月も二個月も経って行くようだった。しかし、長い時間が過ぎ、彼らは一人も墜ちないで頂上まで着いて、瘠せた鳥の姿で一個所に集まり、

頭をつき合わせて祈っていた。

——無一物とは、いいことなのか悪いことなのか、とユニアは独言(ひとりごと)の口調でいった。

——いいとか悪いとか、わしにいえることじゃあない。

——なぜだ。

——わしはあの仲間に入ったんだから、いいと思ったのに違いない。だれに勧められたわけでもないからな。もしわしが今骨になって、存分太陽を吸って荒野に転がっているとすれば、立派な答えになるだろうさ。

——……。

——つまりは、永久に仲間の一人でいるわけだ。わしは永久にそれをよしとしたわけだ。

——……。

——なあ、どう思うか。

——……。

——心臓が鳥なら、荒野で永久に羽ばたいている感じさ。

——体は骨になってか……。

——そうさ。身は早晩だれだって骨にならないわけには行かない。

――実際はどうなんだ。お前はまだ心の裡では仲間の一人なのか。

――そうじゃない。わしは鍛冶屋さ。だれを救うこともできない。死ぬほど喜ばせることもできない。病人を癒すこともできない。

鍛冶屋は笑った。そして、黒いオリーヴをつまんで口へ入れた。噛みながら笑っていたので、オリーヴが歯の一部のように見えた。腐りかけた杭に芥(あくた)がまとっている感じだった。鍛冶屋の現在はユニアには小ぐんまりと平和そうに見えた。だから、彼はこう尋ねたのだ。

――荒野の仲間は石を這う蜥蜴(とかげ)のようだってな。激しすぎるってことか。結局は悪いということか。

――悪いということかもしれん、わしがやっとの思いで別れてきた時にはな。それからだ、だんだん解らなくなったのは。今じゃあ解りっこない。永久に、いいとも悪いともいえなくなった。

――……。

――どっちつかずだあね。世の中で一番いいのは、どっちつかずってことだ。

――もし親爺さんに子供があって、荒野の仲間へ入りたいといいだしたら、どうする。

――同じだろうな。行けともいわないし、行くなともいわない。

二章

ユニアが知っていたことは、荒野の仲間は鋭利な武器をたくわえているということだった。司祭たちは、詳しくか大雑把にか、その事実を調べていた。荒野の仲間は脅威だった。しかし司祭長は殲滅の命令を出さなかった。荒野の仲間に対する尊敬の気持が、民衆の間にあったから、司祭長は事を荒だてたくはなかった。その頃、ローマの総督はなにごとも司祭長に同調していた。

――数はわしにも判らないが、荒野の仲間は刀や槍や鎌をいつでも使えるように準備して、持っている。ゴーゼミロイの教えを実現するために必要だというんだ、と鍛冶屋はいった。

ゴーゼミロイというのは荒野の声ということだったが、今では反逆者の別名にもなっていた。イシュアはその首謀者といわれた人だった。ユニアはイシュアに関する事件を、大体知っていた。昔イシュアは首都の神殿で殺された。彼は貧乏人や病人や、身分の低い人たちに優しかった。彼らを救おうと昼も夜も考えていたし、実際に、大勢の人々に慰めを与え、病気を癒してやった。しかし、彼が司祭たちを罵り、呪ったために殺されてしまうと、死んだ彼を慕うという人はそう多くはなかった。ただ、彼を短刀で刺した司祭が発狂したことは、なにかの徴と受けとられた。

――司祭たちはイシュアを恐れて、連中に特に衆会を許している。仲間の言葉で、ゴーゼミロイは荒

野の声ということだよ。

ユニアは胸を弾ませ、眼を耀かした。鍛冶屋は彼を見守りながら、気楽そうにオリーヴを口へ投げこんだ。そして、ユニアをいなす口調でいった。

——興奮するな。武器はだれも持てないように大事に洞穴へしまってある。そいつを持つことができたのは、二人だけ、わしともう一人だっけ。わしが最初に鎌をといだ時……。

鍛冶屋は急に口調を変え、

——ユニア、お前いくつだ、と聞いた。

——十八だ。

——そうか、わしは十九だった。荒野衆会（ゴーゼバイゴーカ）に加わり、鎌をといだのは。

——俺でいえば、来年なんだな、とユニアがいうと、鍛冶屋は自分を誤魔化すように笑った。そして、

——正直な方がいいからな。ありのままに話しておこう。〈我は知らず。神これを心に懸けたもうべし〉、と心に呟いた。

そもそも彼は、ユニアに穏かな生活を全うさせてやりたかった。彼の本心は、ユニアにいわゆる〈万人のための犠牲〉の役目を負わせたくなかった。だが、ユニアの望みによって、鍛冶屋の心はグラつき始めていた。それまで成るのか成らないのか判らなかったものさえ、成るように思えてきた。ユニアの

望みが形を与え、意味を与える気がした。鍛冶屋は、ユニアと一緒にそれを望んでいる自分を感じた。

——神がわしの心に働いている、と鍛冶屋は心に呟き、自分の声が変ったのを意識した。

——鎌をとがせられるのは、穫り入れのためだと思えた。事実、荒れてはいたがかなり広い麦畑があって、もう色づいていた。その日だった。わしはある一人から掟を聞いたのだ。荒野(ゴーゼ)の人々は種を播かない、刈らない、穫り入れない、倉を持たない。

三章

——神は、人が要るものを知っている。もし種を播けば、播いた人は土地を愛し、自分のものだと思い、播き続けようとする。そこを奪い合い、そのために心は醜くなり、無駄に血を流す。人の血がそのように流れていいものか。荒野の人々はイシュアと同じ清い血を流さなければならない。一致してその時のために生き、その時がきたら死ななければならない。物を持つことは、人間の心に裂けめを入れる。一人の中に裂けめを入れ、大勢の中にも裂けめを入れるというのさ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com